

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：32503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720130

研究課題名(和文)「歩行」表象と文学史的位置づけ

研究課題名(英文)A Study of Literature about representations of Walking

## 研究代表者

山内 政樹(Yamauchi, Masaki)

千葉工業大学・社会システム科学部・准教授

研究者番号：70609502

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：18～20世紀における英小説の歩行表象について研究を行った。18世紀では、上流階級を描いた小説が多く、歩行表象も制度化された庭園散歩や舞踏会のダンスなど身体的機能が習慣や因習によってかなり制限されている。19世紀では、中・下層階級の人物を扱う小説が多く見られ、階級間・男女間での歩行表象の違いや、都市部と田舎での捉え方の違いなど多岐にわたる。ディケンズに代表される都市部では、小説の構成に関わる歩行表象が行われている。ツアーコンダクターのように物語を導く役割をも担っていることが特徴的である。20世紀になると、身体的機能よりも心理的・想像的身体機能の表象が描かれ、空間的制限を超えた描写が目立つ。

研究成果の概要(英文)：I studied the representations of walking in English novels written from 18th century to 20th century. In the 18th century, many novels written about the upper class represent the descriptions of walking characters within many conventions. Therefore, Their physical activities and representations are very restricted. In the 19th century, many novels are written about the differences of walking characters between the classes, men and women, living in the city and country. In the city novels Charles Dickens describes, a walking character unfolds the story, as if he were a tour conductor, by guiding the reader around the city. Through his point of view, we experience and travel the narrative. In the 20th century, some novels represent not the physical activities but the psychological or imaginative activities.

研究分野：イギリス文学

キーワード：イギリス文学

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は博士論文においてトマス・ハーディ小説における『歩行』表象の研究を行った。それを同時代の他の小説においても研究が可能であるか、あるいは Hardy 小説とは別のアプローチが可能であるかを検証することによって、イギリスにおける『歩行』表象が小説においてどのように描かれているか、その歴史的・文化的流れも含めて研究することにした。

また、18世紀と20世紀以降の小説を研究することで、小説に描かれる『歩行』表象の文化史を形成することを念頭に置いて研究に取り組んだ。

(2) さらに、イギリス小説における『歩行』の文化史の研究を基に日本文化との比較・検討をその目的とし、日英文化の比較に取り組むことを目的とした。

### 2. 研究の目的

(1) 研究対象として、『歩行』というあまりにも日常的で当たり前とされている人間の行動様式にも、文化的・歴史的意味合いが必ず付加されていることに注目し、小説という文化的コンテキストの中で、どのように『歩行』が描かれているのか、どのような役割を与えられているのかを研究目的とした。

(2) まず、19世紀イギリス小説の中で描かれる『歩行』表象には、どのような文化的・歴史的影響が組み込まれているのか、あるいはそうではないのかを研究し、続いて18世紀と20世紀以降の『歩行』表象の研究をまとめ、イギリス小説における『歩行』史の作成を目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 18世紀から20世紀の小説を、特に19世紀の小説を中心に、いかに多く読むかが研究の基礎となる。ただ、3年という短い時間であるので、個々の作品を詳細に分析するのではなく、同時代の小説家が描く特徴をまとめて、全体の流れを包括的に把握することに重点を置いた。そのため、小説に描かれている『歩行』表象を性別・年齢・階級・身分・時間帯・場所・一緒に歩く人数・歩き方そのものなどで分類し、包括的な分析を行った。

(2) また、18世紀・20世紀の小説も同様の区分で分類・分析を行った。20世紀小説では、『歩行』表象が少ないことから、映画などの視覚映像も研究対象とした。

(3) 日本文化との比較においては、あまり時間がなかったことから、映画、特に戦争・軍隊などの行軍における『歩行』について研究を行った。

### 4. 研究成果

(1) 19世紀小説において、性別、特に女性(性別)の『歩行』がコンテキストにおいて重要な役割を果たしていることが分かった。コンパニオンを伴う(階級・身分)かどうかの問題となり、また時間帯と場所によってその『歩行』が意味するものは大きく異なる。女性作家(特にジェーン・オースティン)が描く『歩行』は、多くの場合、特に田園地帯を舞台とし、庭園を散歩する「求愛」の一種として描かれているものが多い。並んで歩くことの特質は現在のわれわれにおいても同様で、隣を見知らぬ人が同じ速度で歩いていると、「この人は誰? いったい何?」という感情が沸き起こり、歩く速度を変えたり、その状況を離れようとするだろう。これは人間のすぐ脇の空間は特別なものであるという感覚であり、自分と同じ側で移動するものに特異的なつながりがあると感じられるからである。それゆえ、男女が並んで歩くという行為には特別な意味が付加されるのである。それは公に交際を宣言し、隣を歩くこの女性は自分の所有物であると宣言することになる。

それに対して、チャールズ・ディケンズに代表される都市部を描く作家の『歩行』表象は、子供や労働者階級などを対象とし、田園地帯とは異なる描かれ方をしている。多くの場合、歩行者が物語を進める視点となり、都市観光をするかのように、さまざまな場所を行き来して、読者に対して、名所案内を先導するような役割を果たしている。これにより小説を読み進める読者は、歩行者と同じ目線に立ち、臨場感を得ることができる。このような書き方は当時、交通機関の発達に伴い、ツアー料金の値下げ、また労働状況の改善に伴う休日の利用法などによるツアーの大衆化が与えた影響が大いに関係していると考えられる。『歩行』表象そのものより、歩行者(あるいは語り手)の視点に力点が置かれ、誰が・何に興味を持って・どのように見ているかが問題となる。ただ、汽車や馬車と異なり、歩行の速度に合わせるように展開されるので、読者としても実際に観光をしているかのように読み進めることができる点は重要である。19世紀は大きく分けて都市部と田園地帯では、その『歩行』表象は大きく異なり、また都市部で女性が歩くことは売春婦と間違われる可能性があることから、多くの場合男性による視点が採用されることが多い。田園地帯では「求愛」としての身分の高い人による『歩行』と身分の低い人による『歩行』は分けられる。

(2) 18世紀の小説は移動、つまり『歩行』そのものよりも目的地で何が・誰が・何を・なぜ・行うかというプロット重視の小説が多く見られる。これは交通手段・道路設備がまだ確立されていないことによる移動の苦痛が大きく関係する。また、グランド・ツアーなど一部の裕福な階級しかツアーに参加で

きない状況のため、目的地そのものを描写の中心に据えている。これは海外へは行けない読者の憧れを誘引するもので、その海外の名所など読者の興味をそそる描写が多い。また、『ロビンソンクルーソー』や『ガリバー旅行記』などの影響かもしれないが、移動手段として船を用いる小説が多いことも分かった。それは大航海時代から続く植民地政策の流れを踏襲しているのかもしれない。未知のものに対する憧れと恐怖を描く小説において、『歩行』は原住民(文化的に劣っていると思われる人々)の移動手段であり、征服者として同じ手段を取るわけにはいかないと考えたのかもしれない。ただ、誤解を恐れず単純化して述べると、18世紀小説では『歩行』は、『モル・フランダース』などを代表とする小説で、移動手段、身分を表すためのサインとして機能しているに過ぎない扱いを受けていることが多いと分かった。これは上述した通り、交通手段・道路不備や経済的な問題など歴史的事実による影響が色濃く出ていると考えられる。

また、20世紀初期の小説になると、「意識の流れ」が流行したことで、身体的な移動や行動よりも、意識の中で、あるいは頭の中で人は移動や行動をするのであって、これまでの肉体的・物理的な移動と一線を画するように思われる。さらに車や電車などの交通機関の速度が速まり、手紙や電信から電話へと通信手段が速くなったことで、人と人との物理的・心理的距離もぐっと縮まったように思える。これに伴い、移動手段や移動風景に重点を置くよりも、会話やプロット展開に重点が置かれる傾向が強まった。

(3) 時間の関係上、日本との比較は映画を中心に行った。その際、日本式の軍隊と西洋式の軍隊の行軍を比較することから始めた。その好例として『ラスト・サムライ』の最後の合戦シーンが良い材料となった。侍による日本式軍隊の特徴は、個人の力による秩序を持たない突進型が中心である一方、西洋式は隊列を組んで行軍し、個人よりも組織としていかにまとまって戦うかが問題となっている。これは近代という新しい時代の幕開けを表すかのように、個人よりも社会の歯車となって集団で行う行動が重視される時代になったことを示していると考えられる。それは戦後教育の体育の授業で取り入れられた行進などにも見て取ることができるであろう。それを究極まで高めたのが日本体育大学による「集団行動」であろう。寸分違わずプログラミングされたかのように、個人を殺して、あくまで集団として行動する、その美しさが観客を魅了するのであるが、同時に19世紀イギリスに見られた『歩行』の個性性というものがすっかり廃れていることにも気づく。古くは「ナンバ歩き・走り」など、その歩きぶりやそれに適した服装などから身分や職業を識別することは可能であったが、時代が

進むにつれ、服装や立ち居振る舞いの均一化が進み、その様子だけでは個人を特定することが難しくなった。社会・集団という枠組みにいかにして適した人間を組み込むかに焦点が当てられているように思える。

(4) 18世紀から20世紀にかけて、われわれの行動様式としてあまりにも自明され過ぎて、単なる移動手段としてのみ認識されていた『歩行』にも、文化的・歴史的コンテキストが付加されていることが分かった。18世紀には交通状況が大きな要因の一つであり、読者の空想を掻き立てる冒険書のような小説が多数書かれ、『歩行』そのものより、歩行者の目的地が優先される状況であった。19世紀になると、都市部と田園地帯とでは描かれ方が大きく異なり、また、ツアーの大衆化により、18世紀から続く旅行案内のような役割を歩行者が担うことになる。20世紀初頭は交通・通信手段の発達に伴い、物理的な身体行動よりも、脳内での活動に重点が置かれる傾向があった。

#### <参考文献>

Hillis Miller. *Topography*. Stanford UP, 1995. Morris Marples. *Shank's Pony*. J.M.Dent & Sons, 1959. D. E. Nord. *Walking the Victorian Street*. Cornell UP, 1995. Gillian Rose. *Feminism & Geography*. Polity Press, 1993. Rebecca Solint. *Wanderlust*. Penguin Books, 2001. Kim Taplin. *The English Path*. Perry Green Press, 2000. Anne D. Wallace. *Walking, Literature, and English Culture*. Clarendon Press, 1993. John Tosh. *A Man's Place*. Yale UP, 2007. 菅原和孝・野村雅一(編) 『コミュニケーションとしての身体』大修館書店、2006 鷲田清一・野村雅一(編) 『表象としての身体』大修館書店、2005

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Masaki Yamauchi, "Fanny Robin's Role in Far from the Madding Crowd", 『関西学院大学英米文学』, 査読有, 59巻, 2015, pp.293-304

山内政樹, 『テス』における花の役割、『ハーディ研究』, 査読有, No.40, 2014, pp.37-49

Masaki Yamauchi、 “In Defense of Ethelberta’s Marriage”、 『関西学院大学英米文学』、 査読有、 57 巻、 2013、 pp.212-222

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山内 政樹 (YAMAUCHI, Masaki)  
千葉工業大学・社会システム科学部・准教授  
研究者番号：70609502

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：